

問題 I

訓練をつんだ医者は、胸部X線写真を眺めただけで、そこにわずかな結核の手がかりやあるいは早期ガンを疑うに足る陰影を認めることができる。私たちが同じものを手にしても、そこにはぼんやりとした雲や霞のような白い広がりが見えるだけだ。

実は、医者がX線写真をライトにかざすとき、彼が診ているものは、胸の映像というよりはむしろ彼らの心の内にあらかじめ用意されている「理論」なのである。もし、結核であれば、左右の肺下部のくさび状先端にわずかに水の線が見えるはずであり、もしそれがガンであれば普通とは違った毛細血管の走行が現れるはずだ、彼らの目にはそのような「理論」が前もって負荷されている。

数値、図表、顕微鏡写真、X線フィルム……確かに、科学データは客観的に見える。しかし、データAを目にしているすべての観察者が、まったく同じ客観的事実A'を見てとっているわけではない。一見は、百聞に勝るかもしれない。が、その一見をもたらすものは異なる。そしてその異なり方、つまりデータが一体何を意味しているのかという最終的なアウトプットは常に言葉として現れる。その言葉を作り出すものが理論負荷性というフィルターなのである。

(『生物と無生物のあいだ』 福岡伸一より引用)

問1 理論負荷性とはどのような意味か 50 字程度で書きなさい

問2 医学を目指すにあたり、あなたは理論と観察のどちらを重要と考えるか。立場を明らかにした上で、その理由を 200 字程度で述べなさい

問題 II

——「接続過剰」とは、どういう意味ですか。

千葉 今のネット社会では、ささいなことまでソーシャルネットワーク（SNS）などで「共有」され「可視化」されている。スマホも普及し、生活の細部と細部がかつてない規模でつながる。「接続過剰」とはそういう意味です。

接続が過剰になると、相互監視に等しくなってしまう。ネット上での「楽しい相互監視」が、国家や企業が推進する「監視・管理社会」化を暗にサポートすることになっていないかと考えています。

SNSは、適度に参加すれば、アイデアを得たり、共に考えたりできますが、重要なのは「適度」で、これが難しい。適度に放っておかれるというのは、互いの自律性を確保することを意味しますが、どんどん難しくなっている。接続過剰でも、切断過剰（引きこもり、見捨てること）でもない共生の術を情報社会においてどう考えるかが問題です。

今、ネットで発言すると、データベースに保存されるので、消去の操作をしなければ、時につれて「記憶が劣化し忘れられる」ことがありえない。また、拡散した情報を消去して回することはきわめて困難です。「接続過剰」なネット社会では、コミュニケーションの形骸化も進んでいます。常に「つながりのアピール」が求められる。メッセージが来れば、できるだけ早く返信する。相手からの返信が遅ければ、嫌われていないかと不安になる。

最小限でも反応を返すことが「思いやり」として目的化し、形骸化する。以前の携帯メールもそうでしたが、SNSとスマホの普及は、視聴覚を総動員し、ほとんど依存症のような状態を広げています。

浅田 「接続過剰」な社会では「無視」が許されない。店の冷蔵庫でアルバイトが寝転がった写真がネット上で公開されて「炎上」する「バカッター問題」でも、無視すればいいのに、企業がネット上の批判を配慮して本人を解雇し、さらに損害賠償を求めるなんてことが起きる。昔なら「バカだな」ですんだ冗談なのに。

（「つながりすぎ社会を生きる 浅田彰さん×千葉雅也さん」朝日新聞2013年12月11日の記事を一部改変引用）

問1 本文を読み、つながりすぎ社会とはどういう社会か、その特徴を10字程度の簡条書きで4つ書きなさい。

問2 毎日の生活の中で、適度に「つながる」ためにはどのような点に注意すればよいか。150字程度の日本語で自分の意見を述べなさい。